酒田市立資料館　第２２７回企画展

見て楽しい 昔なつかし 酒田の看板と広告

開催期間：令和４年９月１０日（土）～１１月１４日（月）

開催にあたって

江戸時代から日本海有数の湊町、商人の町として繁栄し、多くの商店が立ち並んだ酒田。時代が明治・大正・昭和と移り変わるなかでも大きなにぎわいを見せました。こうした酒田の町には、宣伝を目的としながらも、それぞれの商店が趣向を凝らした多彩なデザインの看板や広告があふれ、人々の目を楽しませてきました。

今回の企画展では、明治から昭和にかけて作られた看板や広告の中から、一目見て何の店かがわかるロウソクや筆などの商品模型の看板や、「引札」と呼ばれる色鮮やかな明治・大正時代の広告、新聞、冊子などに掲載された面白いデザインの広告を紹介します。昭和レトロな飲食店のマッチ箱や、おしゃれな商店の包装紙にも注目です。

当時の酒田のにぎわいと人々の暮らしぶりを伝える写真も、併せて展示します。

多彩な酒田の看板

看板の歴史は古く、「養老律令（ようろうりつりょう）」の注釈書として天長１０年（８３３）に出された「令義解（りょうのぎげ）」には、店ごとに標（しるし）を立て、名を明示するようにしたことが記され、これが看板のはじまりとされています。

次第に商売が盛んになると、それぞれの商店が趣向を凝らした看板を作るようになり、日本海有数の湊町、商人の町として繁栄した酒田にも、一目見て何の店かわかる筆やロウソクの形をした商品模型の看板や、屋号や絵が板に描かれたものなど、多彩な看板が軒先に飾られていました。

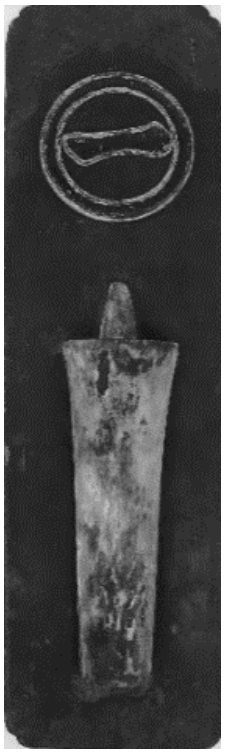
酒田港中町通り／大正

柳小路西側の上中町（現中町２丁目）の通りを写した写真。時計を大胆にあしらった蜂屋時計店の看板が見えます。

ロウソク屋の看板／年代不明

電灯がなかった時代、ロウソクは生活に無くてはならないもので、神仏の儀式用としても需要がありました。

天保６年（１８３５）～明治５年（１８７２）の「蝋燭屋仲間帳」には、２２軒のロウソク屋の名前があり、酒田にもたくさんのロウソク屋があったことがわかります。



「荘内藩御用御蠟燭所」看板／江戸期

黒漆塗りに金字の豪華なこの看板は、「御用」の二文字を入れることを庄内藩に願い出て許された特別なものでした。

酒田でロウソク商を営んでいた商店が店頭に掲げていた看板です。

筆をかたどった模型看板／年代不明

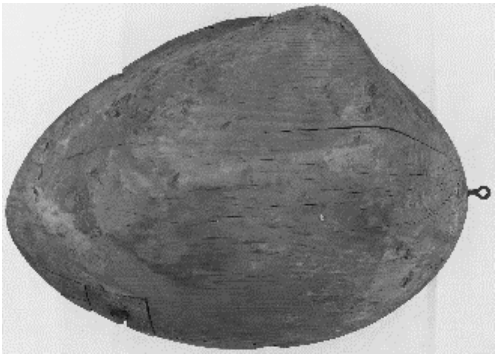
筆製造所の看板ですが、どこの店のものかは不明です。

「蠟燭屋仲間帳」に記されたロウソク屋の名前

天保十一年（一八四〇）

梨子屋　孫七殿	金内政吉殿
杉原伊八殿	羽森彌右衛門殿
市原平三郎殿	玉木金右衛門殿
越前屋吉兵衛殿	松井宗右衛門殿
唐仁屋留次郎殿	田村善兵衛殿
伊藤彌七殿	越後屋喜兵衛殿
武長五郎兵衛殿	茜屋安治郎殿
青塚與兵衛殿	尾花屋久藏殿
大田五兵衛殿	加か屋勘兵衛殿
遠田半右衛門殿	安達幸四郎殿
浅井茂右衛門殿	長崎佐七殿

『酒田市史史料篇六』より



はまぐりをかたどった模型看板／年代不明

昔、薬をはまぐりの貝殻に入れて売っていたことから、薬屋の看板として用いられました。

小野長商店で使われていた
「さらしあん」の看板／明治

小野長商店で使われていた
「蝙蝠（こうもり）印石油特約店」の看板／明治

小野長商店で使われていた
「日本製粉特約店」の看板／明治

小野長商店

下中町（現中町３丁目）にあった商店で、食品や荒物（雑貨）を扱っていました。明治時代は船場町に店があり、船の燃料となる油も販売していました。港に油を運ぶため、男の人たちが泊まり込みで働いていたそうです。

平成１８年２月に完成した中町３丁目の再開発事業によって、小野長商店があった場所は「酒田市交流広場」になりました。現在は酒田市坂野辺新田で、主に食材を扱う「和光食材株式会社」として営業しています。

燕屋の看板／昭和

南千日堂前（現御成町）にあった染物店。下匠町（現中町３丁目）に支店もありました。

燕屋で使われていた「庄慶ポマード」のホーロー看板／昭和

燕屋で使われていた
「大礼黒御紋付特約店」の看板／昭和

燕屋の色見本帳と見本用の反物／昭和

前田三治郎の看板／昭和

酒田大火以前、酒田市立資料館の敷地内にあった商店です。

「うさぎや」の名で知られ、鬢付け油や髪につける香りの良い油を販売していました。ほかにせっけん、ロウソク、マッチ、ビール、サイダーなども取り扱っていました。水口屋は屋号だと思われます。

前田三治郎の広告

「酒田案内」掲載／明治４４年（１９１１）

「高級清酒 亀楽 小野屋」のホーロー看板／昭和

酒田大火が起こった昭和５１年（１９７６）まで、一番町にあった酒蔵です。

「花王石鹸特約販売」のホーロー看板使用店不明／昭和

牛乳石鹸のホーロー看板/昭和

伝馬町（現日吉町２丁目）にあった斎藤伊作商店で使用。

資生堂石鹸のホーロー看板／昭和

伝馬町（現日吉町２丁目）にあった斎藤伊作商店で使用。

資生堂石鹸セールスメンバーのホーロー看板／昭和

使用店不明

明治・大正の酒田の引札

引札は、現在の広告チラシにあたり、江戸時代から大正時代にかけて作られました。商店では、開店や大売り出しなどの宣伝、年末年始のあいさつ用に得意客に配りました。

引札の図柄は店のオリジナルではありません。見本帖から気に入ったものを選んで、そこに店名や商品名を入れて印刷するという方法でした。取り扱っている商品と図柄に関連性がないのはそのためです。

今回は、明治、大正時代に酒田の商店が配った引札を展示しました。

中町通り／明治

海産物商 樋田為治郎の引札／明治

明治５年（１８７２）から１５０年、大工町（現中町１丁目）で営業している老舗海産物商です。

現在の樋田屋商店

新谷又四郎の引札／明治
今町（現北今町）にあった商店。清酒、ビール、煙草などを販売していました。

丸谷庄治郎の引札／明治
米屋町（現一番町）にあり、下駄類を販売していました。

斎藤伊作商店の引札／明治
伝馬町（現日吉町２丁目）にあった荒物店です。

佐藤商店の引札／大正
鍛治町（現二番町）にあった和洋小間物店です。

小野長治郎の引き札／大正
下中町（現中町３丁目）にあり、荒物、石油、砂糖などを販売していました。

引札暦（ひきふだごよみ）

引札に暦を載せ、年末年始に合わせて商店が得意先に配っていたものです。引札暦はとても重宝され、壁に一年間張られるため、広告効果も大きかったようです。

現在も年末になると企業の名入れカレンダーが配られてきますが、実は昔から続いている年末の風物詩なのです。

荒木条太郎の引札暦／明治22年（1889）

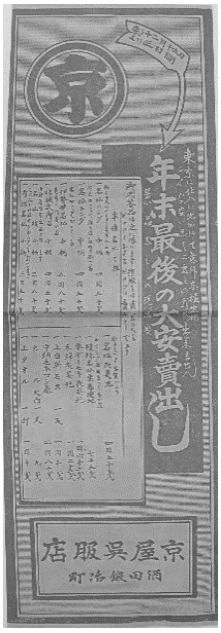
下内匠町（現中町３丁目）にあった米穀問屋です。

嘉納治郎兵衛の引札暦／明治26年（1893）

本町７丁目（現本町３丁目）にあり、和洋小間物、書籍を販売していました。

堀助右衛門の引札暦／明治26年（1893）

中町にあった商店。取扱品目は北海道物産、食塩、紡績糸と書いてあります。



京屋呉服店の広告／大正

鍛治町（現二番町）にあった呉服店です。

日の丸屋洋品ゴム靴店の広告／大正

鍛治町（現二番町）にあった商店です。

昭和レトロなマッチ箱

四角い小さなスペースにお店の名前が入ったマッチ箱も立派な広告です。カラフルでおしゃれ、スタイリッシュな黒一色、落ち着いた和風などデザインもさまざま。お店の個性が伝わってきます。

昭和にはマッチ箱の収集も流行しました。

酒田市内の飲食店のマッチ箱／昭和

昭和３０年代にフリーペーパーを発行した「酒田五店会」レベルが高かった酒田の広告文化

昭和３１年（１９５６）４月に中村太助商店、中村イトヤ、ごろや、小松屋、七桜が「酒田五店会」を組織し、利益を社会に還元しようとレコードコンサート、写真コンテストなどの文化活動を行いました。その一環として昭和３２年から同３４年にかけて、現在のフリーペーパーの先駆けといえる無料のＰＲ誌「てぶくろ」を発行しています。

佐藤三郎など酒田を代表する文化人が編集に携わり、酒田の商業美術界をけん引していた佐藤十弥がデザインを手掛けています。

キャッチフレーズは「私たちの暮し（生活）を美しく豊かにするために」。２０ページほどの薄い冊子ですが、最新ファッション、映画、写真撮影の方法、酒田の文化人による座談会など、店のＰＲにとどまらない文化・生活情報を掲載しています。

あかぬけしたデザイン、レイアウトは今見ても美しく、読みごたえがあります。酒田の広告文化のレベルの高さがうかがえます。

酒田五店会が主催した「風船まつり」／昭和30年代

酒田五店会の活動の一環として、昭和３２年（１９５７）から始まった風船まつり。大型バスに１万個の風船をつけて市内をくまなく巡り、道行く人に三角くじ付きの風船をプレゼントしました。

てぶくろ横丁／昭和30年代

昭和３４年（１９５９）７月、五店会が母体となり、中村書店、トミヤ、中常商店、西田薬局が加わり、中町に「てぶくろ横丁」が開店しました。横のデパートと呼ばれ人気を呼びました。

酒田の商業美術を支えた佐藤十弥

「てぶくろ」のデザインを手掛けた佐藤十弥は、明治４０年（１９０７）、医師・佐藤広と市代の１０番目の子どもとして伝馬町（現中町３丁目）に生まれました。

琢成第二小学校（現琢成小学校）を卒業し、県立酒田中学校（現酒田東高等学校）に第１期生として入学しましたが、中退して東京神田錦城中学を卒業しました。

法政大学仏文科に入学しますが中退。浅草のエノケン一座で舞台装置を担当し、ベースボールマガジン社に勤めた後、帰郷し商業美術展、酒田演劇集団公演などの文化活動を始めました。

昭和８年（１９３３）に再び上京し、同１０年に帰郷。同人文芸誌『骨の木』を佐藤三郎、鈴木泰助らと発行し、文芸活動と宣伝美術に専念しました。

昭和３０年（１９５５）、詩誌『緑館』を主宰発行。同３２年から『みちのく豆本』の装丁を担当しています。自著の詩集もたびたび出版しました。

昭和５２年（１９７７）に斎藤茂吉文化賞を、翌５３年に酒田市政特別功労賞を受賞。詩人、画家、デザイナーとして、酒田の出版文化、商業美術の世界に大きな足跡を残し、昭和５５年に７２歳で亡くなりました。

さまざまな印刷物に掲載された広告

明治時代になると酒田にも新聞社や印刷会社ができます。新聞や酒田を紹介するガイドブック、地図などの印刷物には、さまざまな広告が入っています。今も昔もスポンサーは大事な収入源だったのでしょう。

はじめは文字だけだった広告ですが、次第にイラストが入るようになります。今見てもおもしろいデザインの広告もあります。

「酒田新聞」／明治38年(1905)3月31日付
明治35年(1902)8月に創刊され、昭和15年(1940)12月まで続いた戦前の酒田を代表する新聞です。

サッポロビール特約代理店だった
中村常三郎の広告

中村常三郎は、大工町(現中町1丁目)で、輸入食品や酒類などを扱う中常商店を営んでいました。

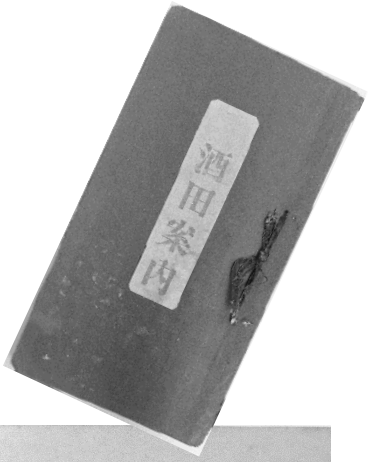
「酒田新聞」
大正5年(1916)1月1日付
酒田の商店の広告がたくさん掲載されています。

サッポロビールの瓶が写っている
宴会風景写真
大正8年(1919)

新町(現南新町1丁目)の貸座敷「越後屋」で撮影された写真です。

中村洋品店(富屋)の広告
伝馬町(現中町３丁目)にあった洋品小間物店。大正１５年(１９２６)５月に上中町(現中町２丁目)に移転し、後に現在の「トミヤ」に改称しています。

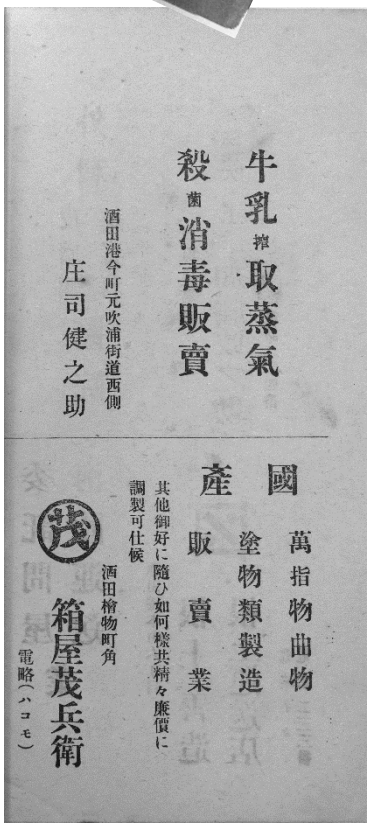
「酒田新聞」
大正１２年(１９２３)９月１２日付



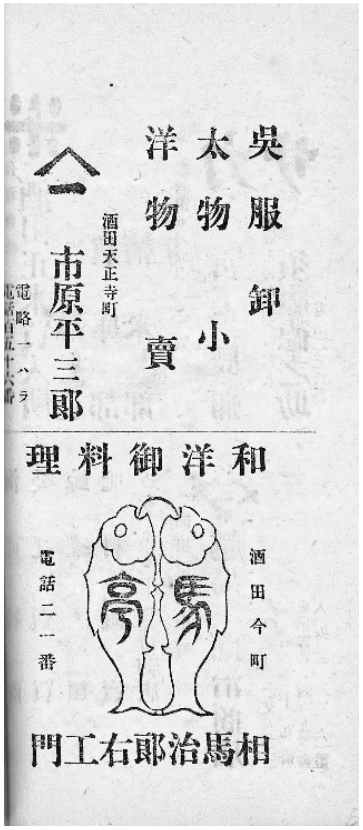
「酒田案内」に掲載された広告
明治４４年(１９１１)中村書店発行

酒田の歴史、商工案内、観光情報などをコンパクトにまとめたガイドブック。

上：庄司健之助の広告
今町元吹浦街道西側(現北今町)にあった牛乳販売店。
下：箱屋茂兵衛の広告
檜物町角(現二番町)にあった曲物屋。



上：市原呉服店の広告
天正寺町(現一番町)にあった呉服太物商。
下：相馬治郎エ門(相馬屋)の広告
今町(現日吉町１丁目)で江戸時代末期から営業していた料亭。現在は酒田の料亭文化を伝える施設「舞妓茶屋相馬楼」になっています。



池田三郎編「酒田すがた」に掲載された広告

昭和１０年（１９３５）酒田港宣伝会発行

酒田市内の商店や企業の広告が掲載されています。

小袖屋呉服店の広告

上中町（現中町２丁目）にあった呉服店。明治１５年（１８８２）創業。昭和４４年（１９６９）には清水屋に次ぐ２番目の百貨店を開業した人気店でした。

菓子店「梅月堂」の広告

本町２丁目にあった、戦前の酒田を代表する菓子店。

西田祐太郎商店（薬局）の広告

江戸時代から続いた歴史ある薬局。酒田大火以前は本町４丁目（現中町２丁目）にありました。

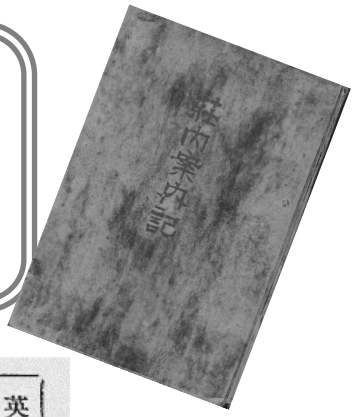
トー屋の広告

現在は食料品を主体とするスーパーマーケットですが、この当時は建築材料、金物雑貨などを扱っていました。トー屋中町店は現在も同じ場所で営業しています。

佐藤古夢編「荘内案内記」に掲載された広告

大正４年（１９１５）酒田新聞社発行

大正３年の酒田駅開業にあわせて発行した庄内のガイドブック。

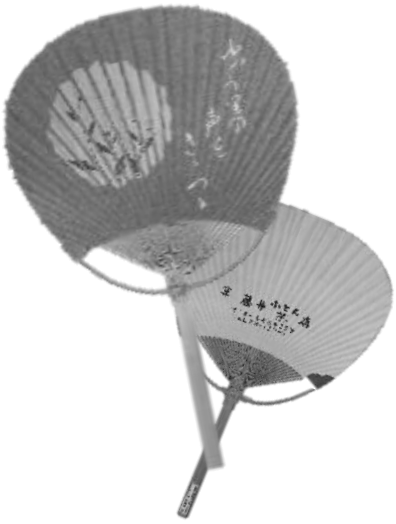


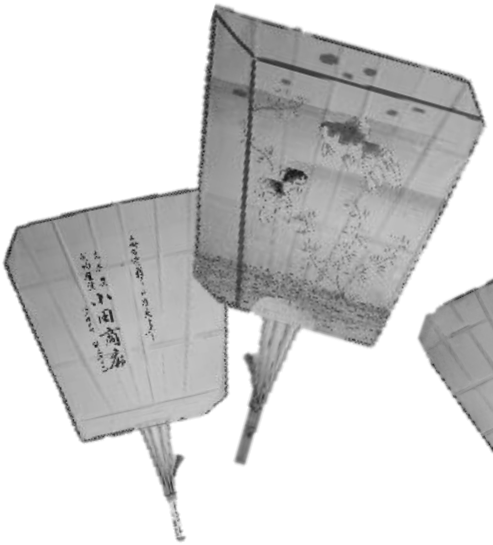
自転車販売店の広告

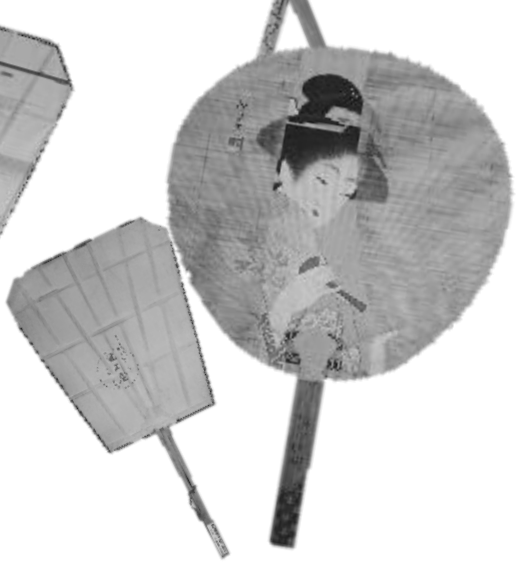
酒田市内の商店のうちわ／昭和

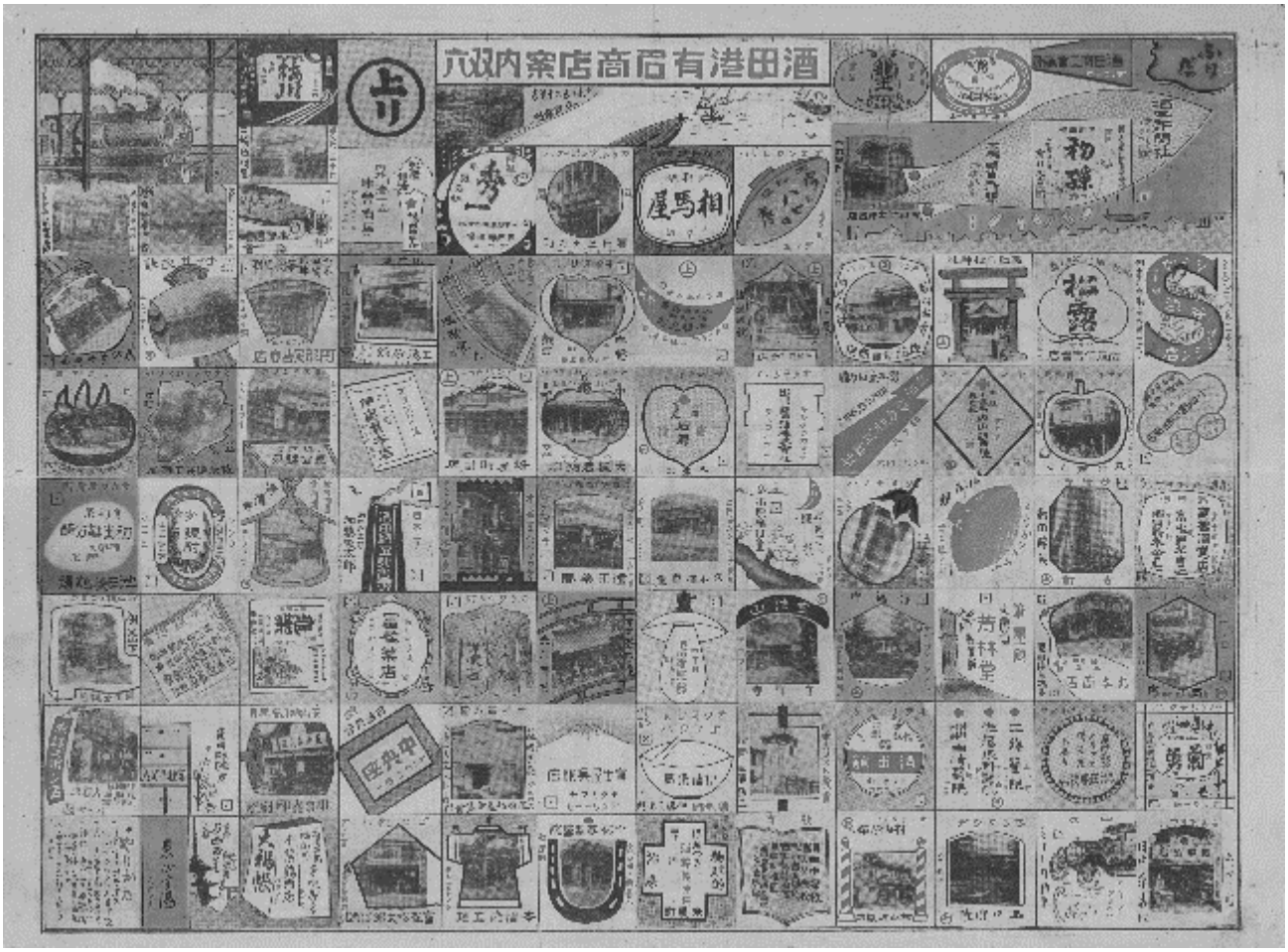
うちわは、古くは儀礼や戦陣の指揮として用いられていましたが、江戸時代になると庶民に広がり、日常的に使われるようになりました。明治時代以降、店名を入れて広告に活用されるようになり、商店が暑中見舞いのあいさつも兼ねて顧客や地域に配るようになりました。

展示している昭和のうちわは、旧松山町の方から寄贈していただいたものです。表面には美人画や季節を感じさせる絵が描かれ、裏面には店名が印刷されています。現在はプラスチック製がほとんどですが、竹と和紙などで作られ風情があります。





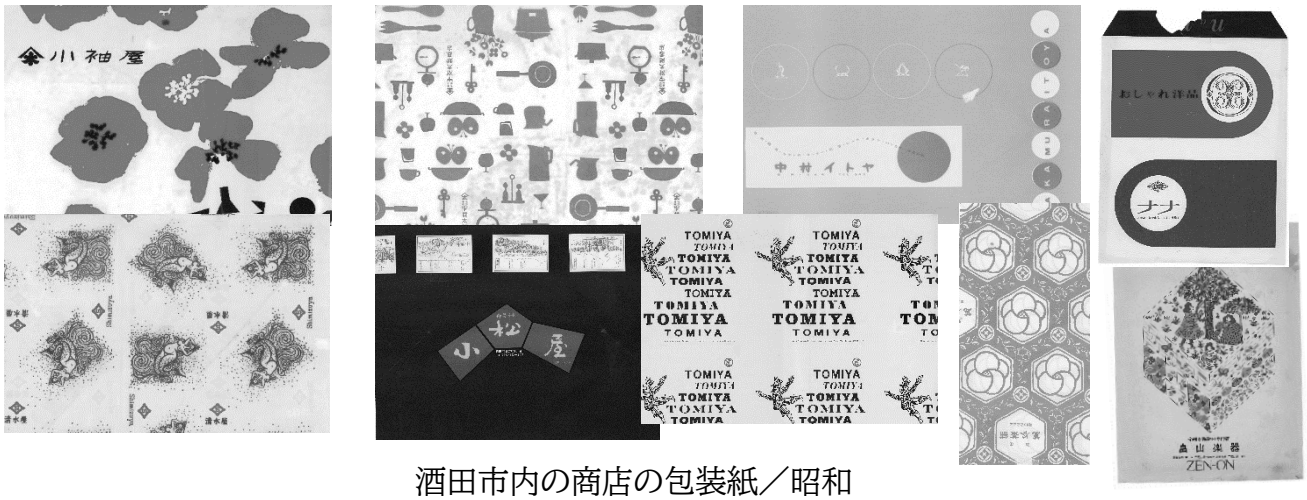




酒田港有名商店案内双六／昭和6年(1931)

表面が「酒田市全図」。その裏面がこの双六形式の広告です。遊び方も書いてありますが、実際に遊ぶのは難しそうです。

酒田市街図／昭和27年(1952)頃



酒田市内の商店の包装紙／昭和

中町商店街初売り／戦後

内匠銀座商店街／戦後

酒田大火から復興した柳小路の広告
昭和５４年（１９７９）

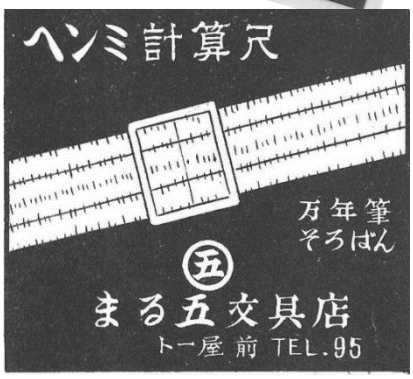
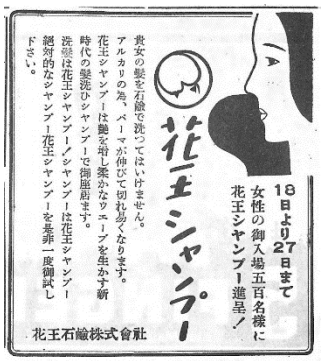
戦後、引揚者の救済策としてつくられた柳小路マーケットは人々の生活に欠かせない場所でした。昭和５１年に撤去されましたが、酒田大火後には仮設店舗が建てられました。

この広告は昭和５４年に新しい街路として生まれ変わった時のものです。新しい店舗が立ち並び、催しも行われました。

柳小路マーケット／昭和50年（1975）

清水屋「夏物セール」の広告/昭和

清水屋デパート/昭和47年(1972)
たくみ通りにあった時代の清水屋。クリスマスセールで買い物を楽しむ人々の様子が写っています。

「グリーン・イヤーズ」に掲載された広告

昭和２４年(１９４９)５月から昭和５１年(１９７６)１０月まで柳小路で営業していた、酒田で最初の洋画専門映画館「グリーンハウス」で、入場券購入時に手渡されていた小冊子です。上映中の作品のあらすじや、スタッフやキャストの情報のほか、酒田市内の商店の広告が掲載されています。